

保育内容「健康」領域について
－「からだ」と「こころ」から－

黒石久昭

Health Area on Child-care
－ The Relationship between Body and Mind －

Hisaaki Kuroishi

保育内容「健康」領域を四年前から授業を担当する事になったが、いつも私の頭を悩ませるのがその内容についての取り扱いであった。

短大生向けのテキストは、毎年各出版社から送られて来るのであるが、どの本を見ても同じような内容であり、授業に使う気持ちになれなかったのである。その原因は、運動遊びの取り扱い方にあり、何故「体力論」からのアプローチをするのか、もっと他の視点からの運動遊びの接近はないのかと言う素朴な疑問からの出発である事を断っておく。

Key words: いきる力 からだ こころ 運動遊び 体力

1. 「体力論」

東京オリンピック（1964年）に端を発して競技力向上（メダル獲得）にその意識が傾き、外国人と同じ体格・体力をつくるにはどうしたら良いかが、政治家やスポーツ関係者から問題が提起され体育関係者もその渦の中に巻き込まれて行ったのがその現実である。明治維新の日本がそうであったように外国に追いつき、追い越せをスローガンに外国文化の取り入れに躍起になったと同じ精神現象がスポーツ・体育の世界にも忍びよって来た。学校体育においても競技スポーツにおいても求められる体格・体力の測定方法が学校にも普及するようになったのである。逆に学校体育において体力測定が実施されることによって体力なる構成概念がより精密化（一般化）されたと言ってもよい。中学生や高校生の様に基礎的な運動（スポーツを含む）をこなせるからだがつくられた時期での体力測定ならばそれなりの結果が生徒や学生に理解され、生活場面やスポーツへの応用、自己のからだへの認識度を深める良い機会となるであろうが、乳幼児期や小学生の低学年に体力測定を実施して、

子供達は何を理解し、習得しているのか甚だ疑問に感じる所である。逆に現代の学生のからだへの認識度を深めてもらいたいと思っているぐらいである。授業（実技）などをしていると、幼児用の跳び箱が飛べない、倒立の練習で両手で自分の身体を支えられず頭から崩れる。ボールを一人で突く直上パスやアンダーパス（協応性・調整力）に至っては、半数の学生が四苦八苦している現状を見ていると、今の学生はなんと体力がないのだと言う思いより、今迄学校体育で何を学んで来たのか、又どんな生活を送っているのかと不安にならざるを得ないのが現実の問題である。又、近年問題になって来ている遊べない子供、何事にも興味関心がない子供、手先の不器用な子供など幼児を取り巻く遊びの自然環境とマスメディアに代表される情報化社会などの社会環境の急速な変化が重なって様々な問題が提起されていることは、大人社会の認める所である。

このような、戦後社会の高度経済社会という社会状況の変化において保育内容もその改訂が急務であった事は首肯できる所である。

それでは、変動する社会状況の中で保育内容がどのような方向で改訂されていったのかを次に検

* 四條畷学園短期大学 保育学科

討してみたい。

2. 幼稚園教育要綱の改訂

第1番目に保育内容に「環境」領域が新しく取り入れられたことである。戦後の高度経済成長を成し遂げた日本が、その代償として自然環境や生活環境を一変したために、再度自分達の住んでいる環境を見直さなければならなくなったのである。急激な環境の変化により対応できない人々が多く出て来たという生活実態が浮き彫りにされてきた社会（文化）状況の変化を読み取る事ができるのである。

またこの様な環境の変化と共に、子供に対する発達観の変化も大きく影響している事も否定しがたい事実である。子供は無能力な存在として生まれて来た人間を育てるといった発達観から子供は生まれた時から自からの力で学び取る優秀な学習能力を備えた存在であるとする研究報告が出されるようになり、環境に占める人間の主体的能動的側面を重視しなければならないという保育の見直しが行われたと言ってよいであろう。

これら両者の相互作用が「環境」という領域を新しく設けた理由であると考えられる。

第2番目に「人間関係」の領域が新しく加えられた事である。何故「人間関係」という領域が新しく加えられたのか、少し社会変化の中で見てゆくことにする。核家族化による母親の育児不安、地域社会の崩壊による地域の子育て機能の凋落、都市化の進展による遊び場不足と情報化による戸外遊びの激減、さらに子供集団の解体等を経験して来た子供達がどのような社会適応を虐げられて来たか。犯罪の低年齢化、学級崩壊、登校拒否、いじめによる自殺、虐待等、今迄に経験したことがないような反社会的・非社会的な行動がより多くなった原因も、やはり先に述べた急激な環境の変化に対応できなかった当然の帰結と言えるかもしれない。親と子供、子供と子供の人間関係の希薄化がどのような結果を生み出すか、いみじくも今回の改訂において『自我が芽生え、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特徴を踏まえ……』と述べられているように人的環境（親・保育者・仲間・地域の人々）が人格形成において如何に重要なファクターであり、それが疎外された場合の今日的

社会状況が増々先鋭化するのではないかという危惧の念があったのではないかと考えられる。以上、今回の改訂における従来とは異なる領域の概要を見てきたが、「健康」領域においては、時代の変化や社会状況の変化に対してどのように対処しようとしているのかを「ねらい」と「内容」においてどのような変化があったのかを検討してみる。

3. 保育内容「健康」領域における「ねらい」と「内容」について

幼稚園教育要領 第2章「ねらい」および「内容」において『この章に示すねらいは、幼稚園終了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情・意欲・態度などであり内容は「ねらい」を達成するために指導する事項である』と述べられ、環境に対して自からの意志で「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」ことから、その結果として充実感を味わうことにより、「健康・安全な生活に必要な習慣や態度を身につける」とし、従来の指導要領では身体面の健康が取り上げられていたのが、今回の改訂により心身の健康についての領域であることが明記された。この事は、幼稚園教育の基本として『幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものである』と規定された内容に従って、健康領域においても、その「ねらい」に明記されたものである。

心身の健康も幼児期における生きる力をどのように育てて行くかという問題に帰着してくる。

4. 保育内容「健康」領域に見られる「こころ」と「からだ」について

先に述べた様に、幼稚園教育要領の第1章総則(3)に「幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い……」とその「こころ」と「からだ」の相互作用を力説していたのであるが、果して教育実践にそれがどのように浸透しているのだろうか。幼・保の指導者を送り出す教育機関においては、「健康」領域なる講義が必須科目として位置づけられている。そして、文部省や厚生省が、その内容を改訂するたびに、その解説書が大学の研究者によって、教科書として販売されその普及に力を注いでいるのである。

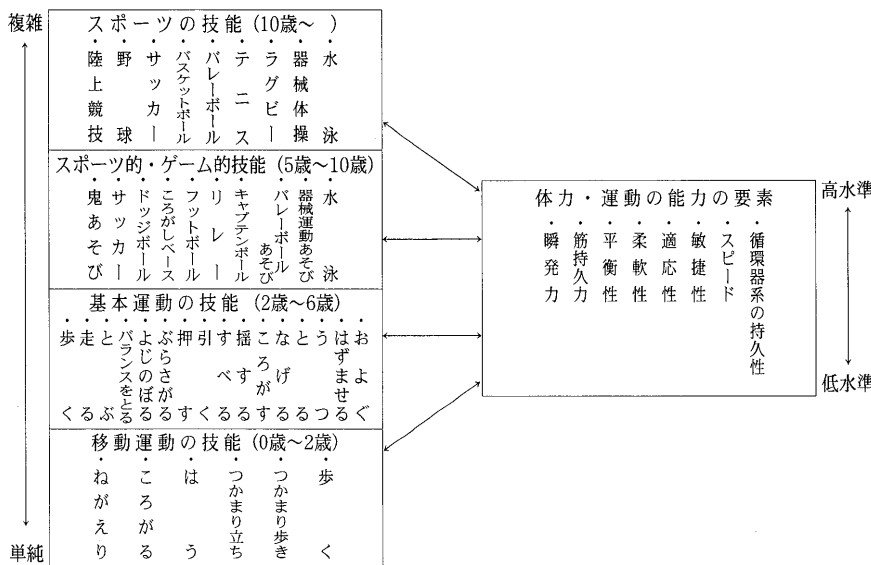
それでは、今回の改訂に当り、どのような「健康」

領域の教科書が出ているのか。その内容を検討することによって「健康」領域における「こころ」と「からだ」の取り扱いの概要が理解できると考えている。

平成元年に新しい幼稚園教育要領が、翌年に保育所保育指針が25年振りに改訂された。

そして、平成2年に「新幼稚園教育要領準拠、領域「健康」近藤充夫編が東京の同文書院から出版された事からも理解できるように、この「健康」領域の改訂に際し、如何に氏の役割が大きかったかが推測される。そこで、その著書から本論と直接関係する「からだ」と「こころ」の部分をもとに取扱っているのかを考察してみる。近藤氏は、次の様に述べられている。^{※5}『領域、「健康」は5つの領域の最初に示される心身の健康に関する領域であり、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う観点から示されているように幼児の生活の基盤になる領域であるといえます。こころとからだの健康は相互に関連し合っているものです。情緒の面で安定している幼児は積極的に環境にかかわって自らからだを動かして遊ぶ幼児です。幼児のこころとからだの健康は発達の基盤になるものであり、発達の諸側面に反映するものです。そして身体的能力の調和的な発達は幼児期において特に重要である』と書かれている内容からも明らかなように、こころとからだの関係に言及しながらも最後には、身体的能力(からだ)の調和的な発達が幼児期には大切である

※6 図1. 全身運動の活動の運動技能と体力・運動能力(近藤)



とし、からだどころの相互の関係性については、この内容からは読み取り難い。特に氏が力説されている幼児期の身体的能力の調和的な発達とは、どのような能力なのかをその著書の中に説明されているのでそれを引用する。

※7 図2. 運動の種類と体力・運動能力(近藤)

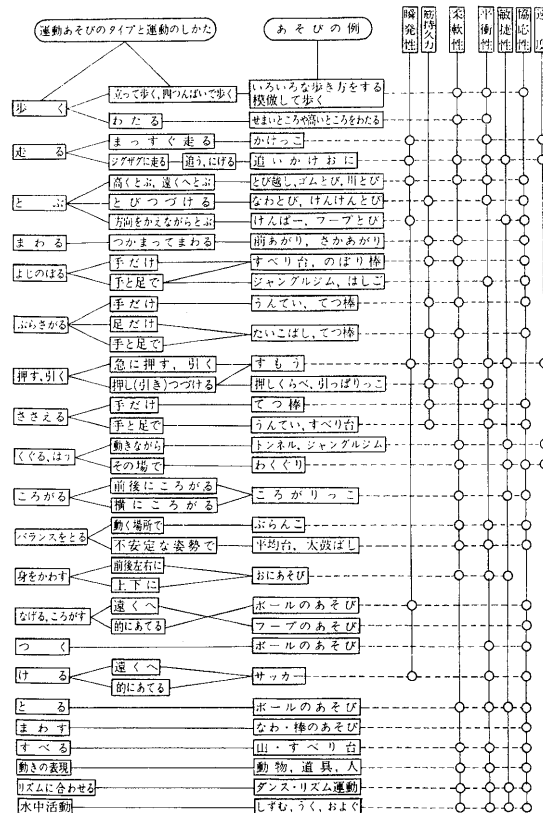


図1は、全身運動の活動が発達段階によってどのような運動技能として獲得されて行くか、それと同時に平行的にどのような体力・運動の能力が向上して行くかを表した図である。将来獲得されるべきスポーツ技能の基礎が幼児期に養われるのである。その発達段階は移動運動の技能から基本運動の技能へさらにスポーツ的・ゲーム的の技能へと発展し、スポーツの技能獲得に至る運動技能の発達段階を示され

ている。特に幼児期における基本運動の技能が運動遊びの中でどのように形成されてゆくのかを図2において明らかにされている。そして運動遊びに含まれる体力・運動能力の要素を取り出し、運動遊びを指導する場合、その運動遊びはどのような体力や運動能力が養われるのかという「ねらい」をもって、指導するべきであると説明されている。以上のように幼児期における運動遊びが如何なる体力や運動能力を身につけさせるかという事が「健康」領域における中心課題であるとされている。それでは、近藤氏が最初に「からだ」と「こころ」が相互に関連し合っていると書かれた「こころ」の問題をどのように理解したらよいのであろうか。

近藤氏が指摘されている「移動運動」から「基本運動」の技能へさらにスポーツ的・ゲーム的な技能の獲得過程においては、内的過程（こころ）の必然的な発達過程が伴うのである。

次に、新保育講座（新教育職員免許法・新幼稚園教育要領・新保育所保育指針に対応）全15巻の中の1巻である新保育内容「健康」杉原隆・柴崎正行・川邊貴子編 ミネルヴァ書房（2001年）から出版された保育内容「健康」編から乳幼児期の「こころ」と「からだ」の問題がどのように取り扱われているのかを考察する。

※8 図3 体力の概念

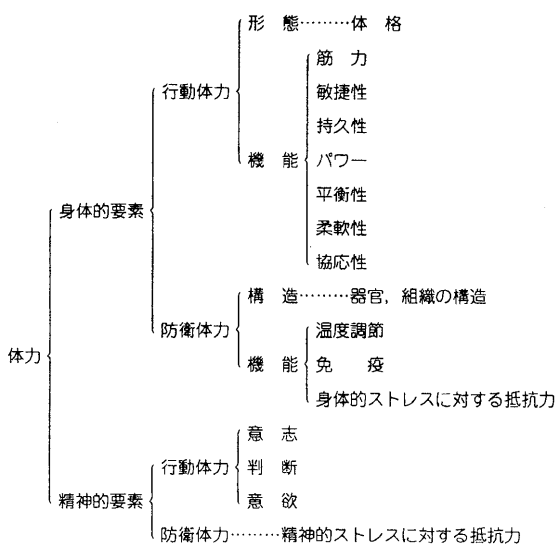
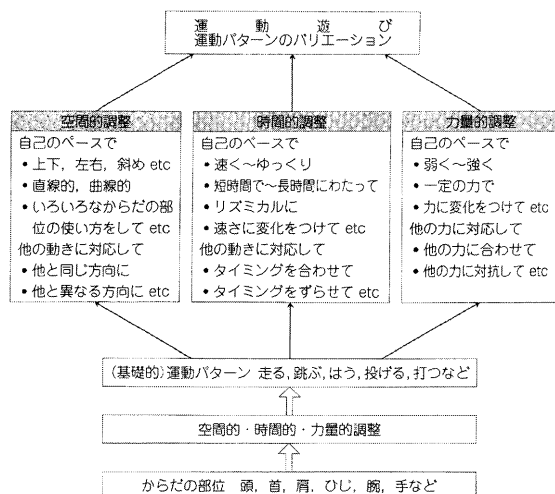


図3は体力の概念を示した図で、上記の著書の中で紹介されたもので、猪飼道夫・江橋慎四郎「体育の科学的基礎」東洋館出版、1965年（P102よ

り引用)よりの抜粋であるが、この図に関する注釈として『体力をもっとも広い意味で使った場合の構成要素が示されている。しかし、これではあまりにも意味が広すぎることから、最近では体力を身体的要素に限定するのが普通である。体力を測定するという立場からは、さらに狭く行動体力の中の機能を意味する。そこに含まれる筋力や持久力は体力要因と呼ばれることが多い』と説明し、『精神的側面を身体的能力とすることには多くの異論があり、体力を身体的な要素に限定して考える立場が一般的である』と杉原氏は付け加えられている。そして、幼児と大人の体力の違いを次の様に説明し『多くの体力づくりの試みが、幼児とおとなの体力の違いを量的な側面からのみとらえており、構造的・質的な違いをほとんど無視しています。この立場に立つ体力づくりは、マラソンや体操などによる体力づくりに見られるように、おとなが体力づくりとして行っている運動を、体力の弱い幼児に合うような小型化してやらせる方法をとっています。……しかし、幼児期の体力要因は青年期以後に比べてはるかに未化であることを多くの研究者が指摘しています。未分化であるということは、筋力や持久力などの能力要因が、それぞれ独立した能力ではなく、一体のものとしてとらえられることを意味している』と述べ幼児期における体力づくりを行なうに当たっては、体力要因別に運動を考える必要のない事を力説されている。それでは、どのようにして幼児期における「からだ」と「こころ」の相互関連について考えておられるのか、その考え方の一部を抜粋すると『おもしろそうだからやる。このように能動的にいろいろなことをやっていく中から結果的に積みあがってくるのが幼児期の学習なのです』と運動学習における乳幼児期の「からだ」と「こころ」の一体感（心身の相互関係）を強調しておられる。それでは、杉原氏は、乳幼児期の運動遊びをどのような視点で捉え直そうとされているのかを考察する。

※ 13 図 4 運動の多様性のとらえ方・構成要素



近藤氏が基本運動の技能を体力・運動能力の要素から捉えようとしたのに対し、杉原氏は、図4に見られるように、(基礎的)運動パターンを空間・時間・力量という運動の三次元的な捉え方をして、その発達を見ようとしている。この両者に共通して言えることは、人間のいきる力の運動を外的な行動変容として捉え、それを動かす内的環境の変化(発達)については、断片的に言及しながらも、運動の発展段階に応じた「こころ」の発展段階がどうかかわっているのかという疑問(心身の相互関係)には、解答を見つけるのは難しい。

[まとめ]

今回の改訂は、乳幼児の心身の諸側面が相互に関連し合いと規定された幼稚園教育の基本に従って領域「健康」編にも「健康な心と体を育て」を目標に掲げて出発したのであるが、「からだ」の部分を中心となり「こころ」の部分の部分が十分に説明されているとは言えないのが現段階の実情である。しかし、我々が現在抱えている諸問題は、自然や社会や文化などの外的刺激からのストレスによって「からだ」と「こころ」の歪みがより大なる傾向にあることを示唆しているように思われる。それ故に、「からだ」と「こころ」の相互の発達の関係の究明が、今後の重要な課題となるのではないかと。

[引用文献]

※ 1 : 1778 年、日本体育大学 正木健夫氏を中心として、日本の子どものからだのおかしさについての全国的な実態調査が行なわれた。

※ 2 : 幼稚園教育要領解説 平 11 年 6 月 文部省 (フレール館)

第 1 章 総則 3 教育課程の編成 (P193)

※ 3 : 前掲書 第 2 章 ねらい及び内容 (P194)

※ 4 : 前掲書 第 1 章 総則 1 幼稚園教育の基本 (P191)

※ 5 : 新幼稚園教育要領準拠 領域 健康 近藤 充夫編 同文書院 (1990 年) P7

※ 6 : 前掲書 P21

※ 7 : 前掲書 P72

※ 8 : 新保育講座 保育内容「健康」 杉原隆、柴崎正行、川邊貴子編 ミネルヴァ書房 (2001 年) P167

※ 9 : 前掲書 P167

※ 10 : 前掲書 P167

※ 11 : 前掲書 P168, P169

※ 12 : 前掲書 P181

※ 13 : 前掲書 P

- 2008. 1. 10 受稿、2008. 1. 13 受理 -

Health area on Child-care
~The relationship between body and mind~

KUROISHI Hisaaki

The revision for the content of education was the task of immediate importance to adapt rapid change of social situation. The purpose for this study is to examine the main purport of the revision of the health area and the treatment of 'body' and 'mind'. The method is to investigate the textbooks which explain the revision. The revision of health area emphasizes the correlation between 'body' and 'mind'. The content mainly consists of 'body' part. However, there are inadequate explanations for 'mind' part. For the further study, it will be needed to investigate developmental stage in the relationship between 'body' and 'mind'

Keywords : Tzest for living, body, mind, play, fitness